

ルカ福音書で描かれている宴席に入ってきた女性は遊女です。遊女は当時のユダヤ社会では汚れた者とみなされていた人物です。その遊女に足を触らせて、髪の毛で拭われたり、接吻させたりさせているイエスとは何者なのか。遊女に触れた者は汚れた者になるので、汚れた者です。つまり、ここに登場するシモンという名前のファリサイ派の人は、罪ある女性とイエスを汚れた者として裁いているわけです。

さて、シモンという名前のファリサイ派の人が、イエスを宴会の席に招いたので。イエスはファリサイ派の人の招待を受けたのです。その宴席の席にイエスは招かれたのですが、その場合は、通常はラビが旧約聖書についての講話をするわけです。それは、ファリサイ派の人物にとって、ユダヤ教の教師であるラビの徳のある話を他の招待したユダヤ人たちに聞かせる場を設けることは、ユダヤ人として立派なことなのです。そして、その宴会で提供された食事の残ったものは、貧しい人に分け与えられることになっていました。そういう状況の中で出来事は起こるのです。

「あっ、罪深い女が入ってきた」「とんでもない奴が入ってきた」。このように宴席を主催したファリサイ派の人は考え、その罪ある女性に平気で足を触らせたり、足に香油を塗らせたりしているイエスについて、「なんだ、この人は。この女がどういう人物であるのかわからないのか」と心の中で考えながら、イエスのことも裁いているのです。このように人を裁く心情に支配されているファリサイ派の人物であるシモンに対して、イエスは『シモン、あなたに言いたいことがある』と言い出して、ある譬え話をするのです。

1

500デナリオンの借金を赦してもらった人と、50デナリオンの借金を赦してもらった人と、どちらの方が、その赦してくれた人を愛するかと尋ねたわけです。すると、ファリサイ派のシモンは『帳消しにしてもらった額が多い方だと思います』と答えました。イエスも『そのとおりだ』と言ったわけです。ここでの「貸し主が借金を帳消しにした」という言葉はカリゾマイという言葉で、語源はカリスという言葉です。

カリスという言葉は、カトリックで聖餐の葡萄酒を飲む際に葡萄酒を入れておく器のことでもあります。意味としては、いい人だなと思う気持ちを表す「好意」や「善意」を表します。これは内面的・精神的な意味ですが、外面的な意味では「優美」「優雅」という意味にもなります。つまり、他人の善意を受けた人が「ありがとう」という気持ちでカリスを言うときは「感謝」という意味になるのです。また、好意が実ることから「恵み」ということも意味します。

ですから、借金を帳消しにされたということは、「善意を受けた」という意味になるのです。新共同訳は「帳消しにしてもらった額が多い人」と訳しているのです。つまり、より多くの好意を受けた人ということなのです。ここで、「どちらの人貸し主をより多く愛するのか」というイエスの問いに対して、ファリサイ派の人物であるシモンが「より多くの借金を帳消しにしてもらった人です」と答えた本当の意味が分かったと思います。それは多くの好意を受けた人がたくさん愛するのだということにつながっていくのです。

そして、このことは神がたくさんの好意をわたしたち人間に贈って下さっている。借りたもの

を全部無料にしてくださいの方が神だということです。さて、ファリサイ派の人と、罪ある女性とみなされていた人の、二人の好意についてみてみると、ファリサイ派の人は初めからイエスに対して、罪ある女性に対しても、何の好意も持っていません。ところが、罪ある女性の方は、イエスの後ろから涙で足を濡らすとか、髪の毛でその足を拭うとか、その足に絶え間なく接吻し続けるとか、イエスの足に香油を塗るとかの好意あることをしています。これはみな、その罪ある女性もイエスに対する愛の行為です。

それに比べてファリサイ派のシモンという人物は実に冷淡です。イエスを自分の家に招いたにもかかわらず、足を洗う水も用意しない、挨拶の接吻もしない、頭に香油を塗りもしない。このファリサイ派のシモンは罪ある女性にもイエスにも冷淡な態度をずっと取っているわけです。そのことが非常に対照的に現れている。

ゆえに、たくさんイエスに好意を示した罪ある女性は、たくさん借金が赦されたのと同じ扱いになるといってわけです。そこでイエスは47節以下で、この譬えの結論を引きだしていくのです。『だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大ききで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない』(47節)とイエスは言うのです。ここでの発言の「赦された」という翻訳は、「今、赦された」と言う意味ではありません。原文は現在完了受動形になっているので、「すでに赦されてしまっている」状態にあるとイエスは言っているのです。

ですから、イエスはここで「私はあなたを赦す」と言っているのではないのです。翻訳だとそのようにも理解することもできるのですが、そうではない。彼女の罪は既に神によって赦されてしまっているというのです。だから、彼女はたくさん愛することができたとイエスは言うのです。

つまり、神の赦しが先にあって、その赦された恵みが基になって、真実に人を愛する行為が私たち人間に生まれるということなのです。このように、キリスト教信仰においては、神に赦されてしまっている存在が私たち人間なのだから、赦された者として他者を赦すということが生きる上での大切な指針になるのです。

マタイ福音書18章に「仲間を赦さない家来」の譬えが出てきます。ある王が家来に貸したお金の決済をした際に、1万タラントンの借金を帳消しにしてもらった家来が、その直後に自分に100デナリオンの借金をしていた仲間を赦さなかった話が出てきます。自分は赦されているのに、他者を赦すことができないこの家来を王は『わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか』(33節)と言って、帳消しにした借金を全部返済するまで赦さなかったのです。

この王は神を象徴しているのですが、自分が神に赦されてしまった恵みの事実を基にして生きていかなければ、この無慈悲な家来と同じ生き方になってしまうという教訓なのです。罪ある女性として嫌われていたこの女性は、自分が神によって赦されて生かされている自覚がなければ、生きてこれなかったのでしょう。その悲しみがイエスに対するあのような行為となって結実したのです。神によって赦されている自覚があるからこそ、他者を愛する行為が生み出されるのです。そのような恵みの事実に気づかされて、今週も歩んでいきましょう。